研究ノート

# ERXOMEとPIJENO：橘氏へのコメントとして

近　松　明　彦

## 0. 序

橘孝司氏は近年、ギリシア語の記述意味論の分野で目立った成果を上げておられるが、移動を表す動詞の使用の差異を解明した論考として、橘(1990)は、ギリシア語学習等、実用上の観点からも、また、語用論的な観点からも興味深い研究である。本小論考では、橘(1990)が記述したerxome(to come)およびpijeno(to go)の「使い分け」の表に対して若干の修正を提案し、さらに、ある種の操作的なモデルの立場から、同氏の説に対する簡単な代案を示唆したいと考える。

橘(1990:§4)において記述されているerxomeとpijenoの表は次のようなものである：

(1)表1

| 移動主体＼到達点 | | 1人称 | 2人称 | 3人称 |
|---|---|---|---|---|
| 話し手 | sg. | erxome | erxome | erxome/pijeno |
| | pl. incl. | erxome | ------ | pijeno(?) |
| 聞き手 | | erxome | erxome | erxome/pijeno |
| 第三者 | | erxome | erxome | erxome/pijeno |

(incl=inclusive)

## 1. 表1に見られる非対称性

ここでは、上記の表1が非対称的であるという点を指摘したい。というのも、到達点が1,2,3人称（つまり、文法的なクラス）に分類され、他方で、移動主体が話し手、聞き手、第三者（即ち、語用論的な関係）へと分類されている。更に、話し手という語用論的関係を担う要素は単数のものと複数・inclusiveのものへと分類される。数が語用論のレベルに属するのではなしに、文法（形態・統語的レベル）に属するものであることは明らかである。このように、この表が扱われるレベルは一貫していないように思われる。

## 2. 表示のレベル

橘(1990:§0.)で述べられている通り、問題の動詞の分布は語用論のレベルで決定されているように思われる。動詞が語用論的関係の選択に関する語彙的情報を有していると仮定しよう。その選択がチェックされる表示のレベルが、意味論的ないし語用論的解釈の行われるレベル、ある種の意味表示

のレベルであると考えても差しつかえあるまい。

3. 表1に対する修正

先の節で論じたように、動詞による語用論的関係の選択が一貫して意味表示のレベルで適用されるとすれば、橋(1990)において採用された文法的用語は次のような語用論的な用語に直される必要があろう。

(2)a. 1人称, sg. or pl.+ exclusive --> [+sp(eaker), -h(earer)]

b. 1人称, pl. inclusive ----------> [+sp, +h]

c. 2人称 ----------> [-sp, +h]

d. 3人称 ----------> [-sp, -h]

他方、意味表示もまた一定の統語構造であるとするならば、移動主体(theme)あるいは、到達点(goal)といった主題関係(thematic relations)は修正後の表からは除外されるべきであり、かわりに、主語名詞句とか前置詞句といった統語的範疇／関係を採用したいと考える。こうして、次のような表2が得られる。

(3)a. 表2

| Subj.NP ＼ PP | [+sp] | [-sp, +h] | [-sp, -h] |
|---|---|---|---|
| [+sp, -h] | a:e | b:e | c:e/p |
| [+sp, +h] | d:e | e:0 | f: p |
| [-sp, +h] | g:e | h:e | i:e/p |
| [-sp, -h] | j:e | k:e | l:e/p |

(e: erxome, p:pijeno)

さらに、表2のg, h, iの行、即ち、主語名詞句に関して[-sp, +h]を有する行と、j, k, lの行、即ち、主語名詞句に関して[-sp, -h]を有する行は同一のパタンを示しているので、区別する必要がない。そこで、次の(3b)の表3のような形に修正するべきであろう：

(3)b. 表3

| Subj.NP ＼ PP | [+sp] | [-sp, +h] | [-sp, -h] |
|---|---|---|---|
| [+sp, -h] | a:e | b:e | c:e/p |
| [+sp, +h] | d:e | e:0 | f: p |
| [-sp] | g:e | h:e | i:e/p |

4. 分類的モデルから操作的モデルへ

本節では、上記の謂わば分類学的記述を操作的な枠組みで捕え直したいと思う。

4.1. 予備的仮定

その前に、予備的な仮定をしておきたい。erxomeとpijenoの両者が次の

ような下位範疇化フレームを有するものと仮定しよう。

(4) +[ ____ (PP) ]

(4)におけるPPは随意的となっている。(5)の後半の文のように一定の文脈において前置詞句は省略される。

(5) θa' rθite avrio stin jiorti mu?

Ne, θa' rθume.

「明日私のお祝いに来ますか」

「ええ、行きますよ」(橘,1990:(13))

(5)の後半の文で、erxomeの生起には主語とPPの両者が関与していると考えられる。この文ではPPが省略されているのだから、erxomeは、耳に聞こえるような形でPPが存在していなくとも、PPのタイプを選択することが可能であると考えるべきであろう。従って、意味表示のレベルでは、ある種の談話規則によってPPが複写され、その上で、PPのタイプのチェックがなされるものと仮定される[1]。

### 4.2. Erxomeの選択素性

上の(3b)の表3を見るとerxomeはe.およびf.の2箇所以外のすべてのスロットに現われている。従って、e.とf.を排除するような、フィルター的な選択素性を仮定しよう。それは、次のような、負の値を有する若干特殊なものであろう:

(6) -[ [+sp, +h] ____ [-sp] ]

### 4.3. Selectional frame of pijeno

Pijenoは(3b)の表3の中のc,f,iにしか見られない。それらのすべては、PPが[-sp, -h]という素性を有する。従って、pijenoは、[-sp, -h]というPPのみを選択するような選択素性を仮定するだけでよいであろう。それは次のようなものであると考えられる[2]。

(7) +[ ____ [-sp, -h] ]

## 5. 結び

本小論考では、(1)にあげた元の表1を完全に語用論的な用語を用いるように修正して、(3b)の表3のようにすることを提案し、更に、橘(1990)における分類学的接近法による記述に基づきつつ、操作型のモデルを採用して再定式化を試みた。

本論考が志向したのは、謂わば、操作型の記述言語学であり、erxomeと

pijenoの相関に対して十分な説明を与えるには至っていない。(6)及び(7)の選択素性の仮定はある意味で暫定的な定式化に過ぎず、それらを包括するより高次の／一般的な原理を見いだす必要があろう。特に、(6)は、(7)と比べて、負の値を持ったフィルター的とも言える選択素性であり、また、主語名詞句と前置詞句の両方に制限を有するなど、特異で、ad hocであるという点で望ましくない点を含んでいる。

注

1. この談話的な複写規則の考え方は、Williams(1977)、Grimshaw(1979)から示唆を受けた。

2. ここで採用した選択素性を利用する方式は、線状的順序が一定していることが前提となっている。それに対し、ギリシア語は自由な語順を有していることで知られている。しかも、2.節で見た様に、選択素性のチェックはある種の意味表示で適用される。このレベルがscramblingによって影響を受けているとすると、一定の線形的語順を前提している我々の接近法が適切に作用しないという可能性がある。一つの考え方は、scramblingに際し、traceに素性[±sp, ±h]に関する情報が残されるものと仮定することであろう。

参考文献

Grimshaw,J.(1979): "Complement selection and the lexicon", Linguistic Inquiry 10, 279-326.

橘　孝司(1990):「現代ギリシャ語における『移動の動詞』と『視点』との相関性」,『プロピレア』(ギリシア語・文学研究会), 第2号, 28-40.

Williams,E.S.(1977): "Discourse and logical form", Linguistic Inquiry 8, 101-139.